

小泉八雲のことども（続き）

根 本 重 熙

在熊時代のハーン先生（教子達の印象による。）

熊本第五高等学校文芸部編纂“竜南”第二百号（大正十五年十二月一特輯記念号）

●いまでは押しも押されもせぬ世界の文豪、小泉八雲先生は、予等の在学当時、五高の先生であって、予等は文法やら、英作文などを教そわったものだ。その頃は、ヘルン先生と呼んでいて、今のように“ハーン”とは呼ばなかった。又小泉八雲とゆう名もまだ多く知られていなかった。先生の教授法は一種独特のものであった。例えば、文法を教えらるるにも教科書を用いらるるでなし、又口授筆記させるでもなし、教場に入られて、出欠をつけらるる。それからクルリと振り返って黒板に向かい、チョークを取って、左上の隅から文法を書き始めらるる。生徒は黙々としてそれを写す。その書かるるや聊の渋滞なく、時間の終の鐘が鳴るまで続く。鐘が鳴ると、一礼して退出さるる。かくして写し来った筆記帳を放課後読んで見ると、秩序整然、然も日本学生にとって最も大切な文法の注意が与えられている。先生は一片の原稿もなく全時間聊の淀なく書き続けられ、然もそれが極めて整ったものであったのは驚くべき技倆と思う。これは先生の天稟の文才もあったろうが、教場に出らるるまでには、頭の中で十分練って来られたことと思う。その後英文学史を教そわった時も、全然この流儀でやられた。然も英文学史は文法の場合よりも一層先生の文才を発揮せられたことは勿論である。（村川堅固“母校に於ける小泉八雲先生”）

●ヘルン師は非常なる能弁家なり。されば会話を教授せらるるとゆうよりも、寧英語演説を聞かせらるるとゆう方が適評ならん。殊にその特徴として熟弁を振われ、言言句句美辞を以て満たさる。故に黒板に向かわるればその文章は復美事にて、美文華句、燦爛目を奪うとも評すべきか。而もその言語文章共に欧州各国の気候、風土、人情、風俗の事あり。殊にイタリー、ギリシャ、スイスの講話等は最も面白く聴取したり。尚先生の最も能弁雄弁を振わるる談論は、哲学神学の談なり。中中面白く談ぜらる。その中特に我我に耳新しく、初は奇異に感じたるぐらいなりし事は、キリスト教よりも日本の神道を賞揚せらるる事なり。この点は西洋人には珍らしき思想の如く感じたり。何となれば我我当時の青二才の考にては、西洋人は皆キリスト教を尊信するものと断定し居りたればなり。然るに師はキリスト教よりも日本神道を賞讃する談を為されしにより、我我はこれを珍奇とし、或は日本人の歓心を買うために斯くの如き言を弄せらるるものかとも感ぜしことありしが、後に至り、師は出雲人を夫人として日本風の姓名を名告り中中日本轟眞なりとの

ことを耳にし、初て先生の言論はその胸臆肺肝より迸る熱情なることを知るに至り、以前より一層面白くその授業を楽しむに至れり。我々の卒業後遂に師は拔擢せられて帝国大学の文学部に教授せられたることを知り、成程先生には最も適材適所なりと深く感じたることなり、惜しい哉。天彼に年を貸さず長命ならざりしを遺憾とす。(藤本充安“竜南二百号記念発刊を祝す”)

●ヘルン先生は当時英作文の先生であった。格別の文士とも思わなかったが、その後帝大に転じその文声世界に轟く。さてさてと思った先生も居られた。(田中治郎“竜南二百号を祝し且つ所懐を述ぶ”)

●先生に長男がお生れになったので私達数人連で一度先生のご家庭を訪問致しました。誕生のお祝を申し上る為。(中略)先生は、お誕生のお子様やら奥様に対せらるる考えは丁度神にでも対せらるるかの如きものであったようです(中略)私が今日でも稍明瞭に覚えている先生のお言葉は次の様なものでした。文章が相当自由に書けるようになるには20年の努力を要する。文章を書くには推敲を要する。始め10語で表わし得た思想ならば9語か8語尚少数の語で同じ思想を表わすように骨折らねばならぬ。6文字綴の語を用いているならば5か4文字綴で置き換える語はないかと探さねばならぬ。“notwithstanding”とゆうような恐しい語は、出来得るならば終生用いぬがよい。長綴の語を用うれば章句の締が弛む。章句は出来るだけ短くせねばならぬ。とゆうようなことでした。(中略)談の間に先生は例の柄付きの眼鏡で、挨拶の為に客間で抱かれているご長男を、よく見られました。私達は嘻嘻として“左様なら”を申しました。回顧すれば、三十三年前の或る暖き夕でした。(白壁傑次郎“五高に於けるヘルン先生”)

小泉先生の東大に就任の経緯：ハーンは在神時代に日本国籍を取得したので、今後は、筆者も原則として日本式の姓(又は名)を用いることにする。

小泉氏が“大西洋評論”誌に投稿した文や、「知られぬ日本の面影」“Glimpses of Unfamiliar Japan”を読み、その流麗な文体や博識に注目した人達の中に男爵神田乃武(筆者注：幼名は松井信次郎。岐阜県の人・蘭学者神田孝平の養子となり後に襲爵。米国に留学帰国後、文科大学教授。わが国英語学の開拓者。貴族院議員)がいた。同文科大学英语学教授オーガスタス・ウッドの任期満了後の後任者として、男は、親友外山正一学長に小泉氏を推薦した。学長もこれに賛成し、既述したように、名誉教授チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)に、彼の招来の仲介斡旋方依頼のため、次の通りに書き送った。

チェンバレン教授

1895年12月6日

少少お願いがありますをお聴き下さい。来年九月から、大学の英文学教授の地位に新しい人が要ります。しかし君も充分ご承知のように、本国から、知らない人を迎えることは甚だ冒険です。

推薦状などは、いつもあてになるとは限らないから。誰か技倆が十分分っている人に来てもらえたら甚だ幸福と感ずる次第です。まだ今の場合では、結局幸福と感ずるようになるかどうか分りませんが、容易に見切らないで、^{あく}飽迄願するつもりです。

君は詩人ヘルン氏を勿論ご承知のことと存じます。私はこの人の文学上の技倆について、随分よく聞いています。こんな事柄に輕輕しく判断を下して君に笑われるかも知れませんが、私は、この人こそ、この頃の著述の^{ほか}外に何の推薦状をも要しない人と思います。こんな天才が何故かかる世界の辺鄙に止まっているのか分りませんが、それは私が、かれこれ言うべきところではありません。そして私は^{ひそか}心密に、この人が長くこの国に止まってくれることを願っています。さて私のお願とゆうのは、もし君にして氏をご承知ならば、この文科大学で英文学を教授して下さるまいか聞いて下さいとゆうことです。私が聞いているところでは、氏は非官立学校主義だとゆうことですが、もしこの反感が、何か高い道德上又は政治上の主義にもとずいているものならば勿論仕方ありませんが、もしその原因とするところが、官立中学校からか、又は以前の校長か同僚の個人的欠点から偶発した些^{きさい}細な故障にあるわけならば、大学では万事もっと好都合であろうと思います。勿論氏は何人にも拘束されずに独立であって^{よろし}宜く又学生の如何なるものかは、君自らご承知の通りです。私の最も恐るところは、氏の近頃の著述は西洋の公衆によって大歓迎を受けたので、地位や金銭の考はこの人を誘引する^{ゆえん}所以になるまいとゆう事です。しかし私は、氏は不親切な人でないと思います。英文学の研究は一日も廃すべからざるのみならず、又よく人を得てそれを教えられることは、日本文学の将来に於て大影響を有することを固く信じてこの手紙を差し上げる次第です。

君の代理の成功せんことを祈りつつ、

君に対して忠実なる、 外山正一

チェンバレンは俸給その他の事柄について詳細な質問をした上で、小泉氏にその主旨を伝えた。それに対して、彼は(既述したように)「よい校長の下で、気楽な学校へ行くことであれば、月100円でもよいが、外国語を三つ、教科書なし、1週27時間、5分間も腰かける暇もない、^{ろく}陸に昼食する時間さえない熊本のことを思い出すと1週1,000円でも行く気になれない」と返信し、学長からそんな学校ではないと詳細な説明をすることになった。彼は二人の熱意に感じて、チェンバレンに次の三条件を提示し、これらが認められるならば、就任要請をば一応受諾してもよいとした。即ち、A：国籍の如何によって俸給が変わらないこと。B：一期限の間雇われること。C：助手助教として他の人を入れないこと。勿論有能な人であれば^{ましつかえ}差支ない。私の妨害をしたり、教師学生間の中傷誹謗をするような人を入れないこと。更に書き加えて「私は注文通りのことが出来るか^{おぼつか}覚束ない。学究的方法で英文学を教えることは出来ないであろう。私は進化論的工夫によって歴史的、感情的に(筆者注：学生の感情、情緒に訴える方法で、とゆう意味であろう。)教えることなら出来るであろう」と。又「この事を妻に聞かせると、妻は“教師にならないまでも(夫八雲

が、東京へは是非行きたい」と言ったが、私(八雲)は東京が嫌だから、数年の辛抱の後、田舎へ引退して一生を送りたい。蛙が鳴く水田、晴れ上った朝の空、霞、野火の香、田圃の歌、笠を被った農夫、素姓が分からぬながらにそれぞれ縁起がある神社の祭礼、小さい店とそこに住んでいる人人の一生、八百屋、飴屋、占師、僧侶神主、漁師、不思議な話を語る巡礼。これらは私の愛する美の世界、私の入るべき世界である」と最後に付言している。

八雲の妻セツは例の“思い出の記”の中で言う。「神戸から東京へ参ります(文科大学へ赴任の為)時に、東京には三年より我慢 難しいと私に申しました。ヘルンはもともと東京は好みませんで、地獄のような所だと申しました。東京を見たいとゆうのが、私の予ての望でした。ヘルンは“あなたは、今の東京を、広重の描いた江戸絵のような所だと誤解している”と申ししていました。私に東京見物をさせるのが東京に参ることになりました原因の一つだと言っていました。“もう三年になりました。あなたの見物がすみましたら田舎に参ります”と申したことも度度ありました。神戸から東京に参りましたのは、明治29年8月27日でした。大学に官舎があるとかゆうことでしたが、なるべく学校から遠く離れた町外がよいと申しまして探していただきましたけれども良い所がございませんでした……」と。

上述の所まで話が進行したので、外山博士は、始めて、小泉宛に書信を送った。

ラフカディオ・ヘルン様

1895年12月12日 東京文科大学にて

昨朝程喜ばしく感じたことは近来ありません。チェンバレン教授は態態君との文通の結果を知らせて御出下さいました。私が教授の助をかりたことが無駄でなく、彼に書き送ったことが、目差す人の注意を引くに至ったことを甚だ有難く思います。私共の友人チェンバレン氏は、この上、仲立ちとなつては、或は誤解が生ずることを恐れるとゆうこと故、失礼ながら、私は直接に君に文通致します。私は君に始めて手紙を上げるのですが、さながら旧友にでも文通する感があります。私はこれまで、いつも“大西洋評論”にある君の寄稿を読んでいます。“戦争後”を面白く読んだのもつい数日前でした。しかし筆を執って君の如き英文の大家に対して文通することを思うと多少臆しないわけに参りません。

ご注意の条件について申し上げます。

A：帰化して日本国民となったために、俸給に関係するとゆうわけは分りませんが、外人の教授が日本臣民となった例は全く新しいので、この点に関しては今少し調査を経た上でなければ何とも申し上げかねるが、私共にまだ分らないことはこの点ばかりではありません。とにかくこのような点に関して、必要な調査をしてその結果をお知らせ致します。

B：“大学の一期限”とゆう意味は、私にもチェンバレン氏にも十分分かりませんが、氏の考によれば、一学生が君の教授を受ける一定の年数を指すのであろうとのことです。どの意味であろうとも、学校の決はこうなっています。即ち議会の協賛を経た通り、大学は外国人の教授を、来る

9月より2年間(より2ヶ月を減じて)を一期とし英語英文学の講座に招聘することが出来ます。しかしこれは本国から来る人にとっては、余りに短期限なので、学校ではこの期限を今年増して3年にしようと議会で要求するつもりです。議会も異議なからうと考えます。それ故議会が許せば、君と約定の期限も、お差支なければ、3年に致したいのです。但し議会が万一承認しなければ、約定の最大期限は1年と10ヶ月になります。しかし双方に異存がなければ(あるまいと思えますが)初の契約の終に又3年それを伸ばせない理由はありますまい。ただ憲法上の手続が煩く加わっているだけです。

C：本大学では、君が困るような助教授、助手に煩わされることはありません。前出Aに関して調査した結果が、君の為に好都合であると分かり次第確たる契約を結ぶことが出来る筈です。幸に本学で、英語英文学の講座を受持って頂くことになれば、学生は君の薫陶の下に啓発される所甚だ多からうと信じます。君は謙遜して自分の資格を軽んじて居られるが、君が言われる通り、英文学は、進化論の主義を本にして、歴史的に又感情的に教えられるならば、これに勝る教え方はあるまいと考えます。ここに封入したもので、英語英文学の外国教師を雇い入れる場合の主な条件が如何なるものであるか分ります。凡の点が明瞭になったらうと思えます。 敬具

外山正一

小泉から承諾の旨の返答に接して、博士は、次のように書き送った。

東京にて 1895年12月20日

ヘルン様

ご存知の通り、つまらない事で、どうかすると、人間は喜んだり悲んだり致しますが、お手紙の初の3字を見て、私の不安がなくなりました。その点について、深謝致します。手紙の始に於て“Sir”などで始まっていると、双方の間が妙に遠慮があって、心からの温かさのあるべきところに、冷淡な隔が出来るように思われます。先達で差し上げた手紙を、その冷たい形式で始めた時、私の心が不満足でした。しかし有難くも君の方からこの忌むべき“Sir”を止めてもよいことにして下さいました。

先の手紙に、時間の点について明瞭に書かなかったことを残念に思います。1日4時間は最大限でしょうが、どこの大学教授でも、そんなに働いてもらえるわけではない。君の場合に於て、実際の受持時間は、1日に2時間即ち1週12時間以上になることはありますまい。勿論多少の“直しもの”もありましょう。それは教師に覚悟してもらっています。君の文学上の述作をなさるのに十分な時間があると信じます。又日本人の性格の研究に関して、一新天地を開くようなもの故、大学の人人と親密になっても、君の述作も、性質に於て損害を受けるようなことはあるまいと思われます。

友人が“東の国から”を一冊進んで貸してくれたので、私は大愉快を以て、数日前に読み終わりました。その中には、全く人を感動させる所が多くあります。今度の“心”を一部下さると

のお約束は有難く御礼申します。私の方ではその代^{かわり}“新体詩集”を1部謹んで呈上致します。日本語ですから、君に面白いかどうか分かりません。吹聴^{ふいちよう}のようで恐れ入りますが、少しこの書物について言わせて下さい。恐らく君はご承知でしょうが、日本には、欧米にあるような本当の、或は感情が現われた、読方は、講釈師のようなものを除いては外^{ほか}にありません。私は人が日本文を朗読するのを聴いていると、いつでも皆必ず変な節で、それを読み上げるだけです。新体詩でも、感動を与えるように読む為に書かれるのではありません。作者自身でも、自分が作ったものを、如何にしてよく読むべきかなどの考えは少しもありません。そこで私は、このことを数年来研究しています。この進呈した書物の中にある私の作は“人生の讚美歌”又は“サー・ムーアの葬式”の作の如く朗読し、高唱しようとする特別な目的で書いたのです。文体は我流で、一風あります。そこで世間や、批評家は全く狼狽しているようです。即ち強い句、その他そんなこと、に全く無学な人人にとっては、普通の七五調や五七調の作の方が、もっと自然で、もっと上品に見えるからです。

ついでに申し上げるが、サー・エドウィン・アーノルドの“喇叭手・白神源次郎”の詩をお読みのことと想像します。もしお読みならば如何お考ですか。私にはあの詩は少し冷やかで、充分の情熱がないように見えます。サー・エドウィン・アーノルドは冷たいインキで書かないで、燃ゆる血で書いているとは思われません。しかし私は大分生意気になったようです。桂冠詩宗の候補者に対して、日本人の癖に、こんなことをならべるのは全く出過ぎた沙汰です。

クリスマスのお祝を申し上げてもよいでしょうか。

忠実なる、

外山正一

以上のような書翰の往復を経て、小泉就任のための手続の段階になって、次の規定があることが分った。

「新^{あらた}に日本人を雇い入れる場合には月俸100円を越えることを得ない。但し特別の技能を有する者はこの限でない」という意味のものである。小泉氏は元^{もと}英国人であるが、日本に帰化した以上、外国人並^{なみ}の契約は出来ない。日本人並のそれでは大きな不利である。そこで俸給は西洋人並で特別待遇の講師となり、契約期限は外山博士との黙約で、表面上は明治29年9月から30年3月までであった。そして翌年から一年毎の契約を繰返した。1週12時間授業で月俸400円(但し、最後の2年間については、月額450円であったとのことである。)

当時の、小泉から西田宛の書翰3通

親愛なる西田

1896年 東京にて

私はただ12時間教えます。教科書は、二組の外には使用しません。ミルトンの“失樂園”(Paradise Lost)とテニソンの“皇女”(Princess)(私の指定によって)です。私は“失樂園”を指定しなかつ

たのですが、各級の希望が別別でしたから、投票させた結果は、78名の中、63名は“失樂園”を選んだのです。奇妙です。(単にそれが彼等にとって難^{むづか}しい書物だからだろうと、私は想像します。)他の級は専門の級で、英文学の特別な部門について講義をします。無論この地位は費用がかかります。来年の夏迄に、私は1,000円ほどの書物を買入れねばなりません。

学生は甚だ親切で、愉快的連中です。昔の熊本学生が私を招いて会を催してくれました。そして私は彼等に演説をしました。彼等は、八百屋お七が、その若い僧侶の恋人、吉三様と逢っていた寺で会を聞きます。そこは吉祥寺と申します。私の生徒で、判事や教授、技師などになった者に逢いました。私は随分うれしく感じました。(後略)

親愛なる西田

(前半略) 私は陛下が大学へ行幸あらせられた(筆者注：明治29年12月に)ことを、お話し上げたと思じます。私が礼服を着用したのは、それが始てです(筆者注：小泉は学長に対して、^{あらかじめ}予め、シルクハット、ワイシャツ、フロックコートや燕尾服を着用しない特権を要求し学長はそれに応じていたとのことである。)元来私は礼服を好きません。西洋では、劇場でさえ必須の場合もありますが、誰も好く人はないのです。しかし習慣とゆうものは、いつでも稍窮屈^{きつ}なものです。そして重要な地位を占めている以上は、それを遵奉せねばなりません。外人教師の会合は面白いものでした。彼等は英仏独伊露など種々の国民を代表しています。総会に於ける用語は、一同が理解する仏語です。ドイツ人は皆英語を知っていますが、仏国人は知りません。或は知っているにしても、極めて不完全です。仏国人の自国語に対する保守癖は面白いことです。また美的見地から申せば、それは正常です。仏語は欧州語の中で最も優美で、且つ完全ですから。

クリスマスも元日も、朝は霜が降って、快晴でした。(後略)

例の、セツの著書から彼女の思出話の一部：ハイカラな風は大嫌いでした(八雲が)。日本服でも洋服でも、折目の正しいのは嫌いでした。物を極構^{ごく}わない風でした。燕尾服は申すまでもなく、フロックコートなど大嫌いでした。ワイシャツや、シルクハット、燕尾服、フロックコートは「なんぼ野蛮の物」と申しました。神戸から東京へ参ります時に、始めてフロックコートを作りました。それも私が大層頼みましてやっそこしらえて貰^{もら}ったのでございます。「大学の先生になったのですから、フロックコートを一着持っていなければなりません」と申しますと「ノウ、外山さんに私申しました。礼服を私大層嫌います。礼服で出るような所へ私出ませんが、宜しいですかと言いました。それでよろしいですと外山さんが約束しました。ですから、フロックコートいけません」と言うのです。しかし漸^{ようや}くそれを一着作りましたが、それを着用したのは、僅か四五回でした。これを着る時が又大騒です。いやだいやだと言うのです。「この物、私好きない物です。ただあなたのためです。いつでも外^まにの時、あなた言う“新しい洋服、フロックコート”皆私嫌いの物です。冗談ないです。本当です」などと言っていてやがりますけれど、私は参らねば(彼も、

礼服姿で出るべき所へ)悪いであろうと心配しまして、気の毒だと存じながら、四五回ばかり勧めて着せました。自分がフロックコートを着るのはあなたの過だと申ししていました。或る時冗談に「あなた日本の事を大変よく書きましたから、天子様、あなた^は誉めるためお呼です。天子様に参る時、あのシルクハット、フロックコートですよ」と申しますと「それでは、真平御免」と申しました。この真平御免とゆう言葉は、前の西洋嫌いの華族の隠居様の話(前出)で覚えたのです。マッピラという発音が面白いとゆうので、しきりに真平とゆうことを申しました。

外出の時はいつも背広でございましたが、洋服よりも日本服、別して浴衣が大好きでした。傘もステッキも持ったことはございません。散歩の途中雨に逢っても平気で帰るのですが、余りに烈しいと、どこででも、車を見つけて乗って帰りました。靴は兵隊靴です。流行には全く無頓着でした。(中略)ワイシャツやカラーなどは昔から着けなかったようです。フロックコートを、仕方なく着る時でも、カラーは極低い折襟でした。一種の好は万事につけてあったのですが、自分の服装は少も構わない無造作なのが好きでした。シャツと帽子とは、飛び離れて上等でした。シャツは態態横浜へ参りまして、フランネルのものを1ダースづつ^{あつら}誂えて作せました。帽子はランヤの鍔広のばかりを買いましたが、上等の物品を選びました。(後略)

親愛なる西田

(前略)外山博士は、ますます好きになります。珍しい人です。本当に真面目な、しかも世馴れた、非常に親切な、そして非常に卒直な、皮肉の言える人で、皮肉などは中中上手です。外人教師団の中には、この皮肉を大分気味悪がっている人も居ます。私も中中鋭いのを側で聞いたことがあります。博士は未だ直接に私にはやりません。よく私の性質を理解して居ると見えて。英文学者やその価値について中中よく知っている。自分の専門のことは殆ど語りません。どうしてあれ程英米文学者を研究する暇があったものか分かりません。私には、学生の事について色々注意してくれました。学生の好や、彼らを喜ばすことについて。

小泉氏起用の立役者・外山正一

旧静岡藩士、江戸生れ。幼名は捨八。号は、山。慶応2年、幕府留学生として英国に赴くも、間もなく幕府倒れ、帰国。明治3年に渡米、ミシガン大学に哲学を学び、同9年帰朝。後に東京大学教授。同21年に文学博士。同30年11月に東京帝国大学総長。同31年4月に伊藤内閣に文部大臣。その後2ヶ月で同内閣総辞職。同33年3月8日没。とゆうのが、年譜風に述べた外山の履歴である。この人に対して小泉は、前掲西田宛の書翰の中で、人間的美点を列挙して、その人物を賞揚していること、この人の葬儀に参加したこと(小泉はその生涯を通じて、葬儀に参加したのは、この時だけである。)は自己の発掘者、起用者としての感謝の表明に止まらず、その人間像への並並ならぬ傾倒を意味するものでもあるようだ。外山は前掲書信にて仲介役の教授に、売出し中の作家に対しては、真正面からの、地位や金銭による引力に重点を指向することには疑を表明し、

仲介者を通じて、小泉に伝えられることを暗に期待していたのか、“あの人は不親切な人ではないと信じる”とて彼に、^{からめて}搦手からも肉迫する方策をも用意しているあたりは、単なる象牙の塔的学者衆や、青白きインテリ達とは異質の、太い土性^{としようほね}骨の持主であつたらしい。前述の通りの、小泉先生の真摯な教師ぶりの為に、述作に十分な時間があると信じるとの外山の予想は、結果としては裏切られることになったのだが、小泉としては、漢文調の表現を用いれば“士は己を知る者の為に用う”（男は自分を知ってくれる人の為に力を尽くして働く、諸橋轍次訳）の心境であつたかと思われる。兎に角、以上の様な人間関係（金銭的の損得から離れた所にでも成立する態^{てい}の）の構築を可能にする騎士道のおよび武士道の感覚が依然として夫々の影響力を有効に行使し得た、古き良き時代のお話とでもいうべきであろう。

同大学の学生齋藤信策は“小泉八雲氏を悼む”（帝国文学、小泉八雲記念号）で言う“（前略）吾人は、謹みて氏（小泉八雲）を薦め、^{つゝ}氏を尊びて、一切の自由を与え、思うがままに（小泉先生が）、氏をして活動せしめ、以て大学に光あらしめし、故外山博士の将帥的態度を讚美すると共に氏の功績を称揚して己まざる也（以下略）”と。（次の備考は伊藤整氏から）

備考：齋藤信策は高山林次郎（樗牛）の実弟。林次郎は齋藤家の出で次男。三男良太、四男信策、五男信平、^{そろ}揃って秀才。肺結核に罹り易い体質を遺伝していたらしい。樗牛は明治35年に31才で死んだ。三男良太は第一高等学校在学中に倒れた。信策は第二高等学校（仙台）を経て東京大学に学んだ。非常な秀才で真面目な学生。東京大学独文学科に在学中から、文芸評論をば「帝国文学」等にて発表。号は「野の人」。兄の死後、自分も短命であろうと思ひ、勉強と仕事に超人的努力を傾注。大学を卒業すると大学院で、ケーブル（前出“異端者を、その魂を救うために、生きながら焼き殺して然るべきだ”と放言し小泉を煙に巻いた豪傑教授）のギリシャ文学に一人だけの学生となった。ピアノを習ひ、絵を学び、芸術のあらゆる分野に挑戦を企図した。小説家小栗風葉の“天才”のモデルは信策であつたとゆうことである。同42年に31才で肺結核の為死去。

外山博士が、よしんば神田男の推挽（前述のように）を経てであろうと、その前に自分でも、ウッド教授の後任者として、小泉に白羽の矢を立てていたのであっても、彼が最適任者であることを確信し、最近の著述以外に何の推薦状をも要しない人であると言ひ、技倆が十分に分かっている人を欲しいと陳述し、英文学の研究は一日も等閑^{なござん}にできない、人（暗に小泉を意味しているのであろう。）を得てそれを教えてもらうことは、日本文学の将来の発展に至大の好影響を与えることを固く信じているとも書いている（前掲書翰に）。彼の確信の堅牢さが想像できる。その上に立って綿密周到なる心配^{こころくばり}（相手方が、流行作家であることを考慮して地位や金銭は（繰返多謝。）好餌？には、なり得ぬ事の現実認識について、仲介教授に、予めその確認を求め、彼が何人の拘束下にも立つ要が無いことを付言し、その非官立学校主義にも触れて、大学では万事好都合であろうと示唆し、小泉宛書翰の中では、彼が助教授、助手に煩らわされることは絶無であることを保

証し、自分の資格を君は謙遜しているとして鼓舞し鞭撻することも忘れてはいない。更には小泉氏が講座を受け持つことを承諾したとしてと仮定し、学生が多大の啓発を受けるであろうと未来を展望してみせたりもした。)を縦横に駆使して、小泉の就任を要請し、又一方では、彼の好都合に契約できるようにと一途^{いちす}に心を砕いている。

上述のような状態に接しては、小泉八雲たる者、感奮興起せざらんと欲するも、豈^{かに}得べけんやである。古き良き時代にも、小泉氏にも限らないことではあろうが。外山の人物鑑定眼の靈妙さ、小泉先生就任の為の外山博士による真摯な努力の正当な存在理由?と更には、小泉が構築した英文学史の無比の独創的堅牢性とが、然るべき検定、批判を経た後、それぞれの評価が不動の客観性を確立したのは、この勝^{すぐ}れて個性的な両当事者の没後のことに属する事実は、歴史(又は運命)の皮肉とゆうものであるだろう。前出小泉の“非官立学校主義”の内容説明ともなり、目下売り出し中の新進作家の喜の声をも聞き得る、西田宛の書翰を掲げて見よう。

(前略)私が官立学校に奉職中蒙った極悪非道の待遇は別として、私はまた、日本人となることは到底出来ないし、日本人全体からは、真の同情を見出し得ないという事実を認めねばならなくなりました。私は、私と同一人種の人人の間へ立帰る必要を感じたのです。彼らはあらゆる欠点を持っていても、同情と親切を持ち、且私と同じ色^{かつ}の靈魂を持っています。日本人を理解し得ると信じている外人こそ、愚さの骨頂です。(後略)

1894年10月23日

神戸クロニクル社にて

(前略)私は目が悪いので、不愉快に暮らしています。前途茫茫の感があります。私は熊本で受けた待遇に対して嫌悪の情に堪えないために、出雲の旧友を除いては、全部の日本人を嫌いになったように感じます。私は日本人の手紙に返事を書かなくなり、日本人の訪問者には面会を拒絶しています。高等師範学校教師シーモア氏も、同様の迫害によって罷免されました。氏は九年間奉職し、日本人妻と、五人の娘(二人は大きくなっているが)を持っています。氏は正月に、長女と次女をつれて英国へ去って行きます。氏の妻君と他の子供は、後から行くでしょう。当局者は、相当な俸給を受けている外人教師全員を解職しようとしているのだと、私は想像致しますそれは正当なことです。一層の得策だとさえ私には考えられます。しかし、日本のために、又雇ってくれている人人のために、全心全力を尽していた人達を侮蔑し、虐待するのは、正当ではありません。さて、兎に角それは結構です。私を悩ます唯一の問題は、私の家族のために、どうしたらよいかとゆう事です。私も又去って行かねばならぬかと心配しています。

上掲2通の書翰において、前者では、日本人となること(帰化手続をとって、法律的には日本人となっても)に絶望し、同一人種の故国へ帰る必要を痛感していると言い、後者では、日本から去って行かねばならぬかと心配していると述べるのは、矛盾感を乗り越え、滑稽にも思われる。

前出の在米の心友ヘンドリックに宛てた手紙で、小泉の所謂蛙池の蛙共のように、最初から、ぼろい利潤の追求を唯一絶対の至上命令と心得ていたでもあろう、当時の神戸、横浜外人居留地の外国商人の面々とは相違して、小泉自身を含めて、彼が言う“日本の為に、又雇って来てくれている人人の為に、全心全力を尽して来た人達”にとっては日本および日本人に対して、絶望的になったり、次の瞬間には、去り難い気持になったりして、とつおいつ、揺れ動いて不安定な精神状態に時時、陥ることがあってもその事は特に不思議ではないことかも知れない。

次にハーンは、西田に、前文に続いて述べる。私の著書は外国で好評を受けています。多大の賞讃を受け、宗教上の意見のため少しばかりの非難を蒙っていますが、大体において、文学的には、天晴の成功です。あなたは、きっと、どっさり誤謬を発見なさったことでしょう。それから、日本人が好まないことも書いてあります。しかし、その著書は、屹度思慮ある外人をして、少少日本を愛するに至らしめるでしょう。誤謬の点はあるても。(中略)あなたに対し永久に私の最高の好意を表します。あなたの如き日本人が稀なのは何故か。それは私達の他日の談話でのお楽に。私の新著「東方から」“Out of the East”が、目下印刷中で来春日本へ到着の筈だとゆうことを、あなたは、お喜び下さるでしょう。それは出雲のことに幾分説き及んでいます。「日本瞥見記」“Glimpses of Unfamiliar Japan”の方は既に1800部売れました。私は可成成功しそうです。(中略)「東方から」には、巻頭に、あなたへの献呈の辞を載せます。

(前略)私は、日本の何所よりも京都に住みたいものです。東京は日本で一番ひどい所だから、なるべく短期間にしたいのです。天気は悪く、地震は恐しく、東京の外人分子と日本人の官僚風は堪らないに違ありません。私は日本を感じ日本を見たいのです。東京には少しも日本はありません。(中略)あなたは私の著書が、今英国で余程の注意を引いている事をお喜び下さるでしょう。英国で評判を博するのは、非常に困難ですが、米国に於けるよりは、遙かに重要なことです。

「東方から」は、英国で、私の最初の著書以上に印象を与えました。「心」“Kokoro”については如何なる批評を受けるか分かりません。それは英国のあらゆる因襲および信仰に反する急進的な著書です。しかし、あなたや、私の僅かの日本人の親友が、それを好いて下さるならば、私は愉快なのです。

貴君が、お喜び下さることと思いますが、私の健康さえよければ、文筆の仕事だけで、独立の生活を営み得る見込みがつかしました。だから、日本を去るにも及ばないのです。去年は約1,300円の収入を得ました。そして、来年は、もっと有望です。沖縄又はマニラへ行行って、僅の通信を送ればそれに対して、巨額の報酬が提供されます。私の第四冊目の著書は、目下印刷中、来年夏には、

更に第五冊目のものを出版の見込です。官立学校に於ける非常に心配の多い教師の職よりも、これは私共にとって遙に幸福なことです。更には、一度堅実な文字的名声を得た上は、容易に、私の子供を海外で教育することが出来ます。またよい地位を得させることが出来ると思います。(中略)私の健康に支障がない限り、全く文筆の仕事で生活して行くようにするのが、私の義務だと思えます。

お手紙拝誦、私が以前よりも、日本を稍よく理解するようになったとの貴説を承り、愉快に感じました。私の著書は米国と同じく、欧州でも成功を博しました。仏国の主要な評論雑誌は、私に関する長い論文を載せました。「スペクテーター」“The Spectator”, 「アセニアム」“The Athenaeum”, 「タイムズ」“The Times” その他の英国諸雑誌も好評を与えてくれました。しかし、私はその賞讃を事実に対するものだと誤解する程愚ではありません。毎日益々、私自身の無知を感じて来るし、また当然、日本の事は、別にこれと言って取り立てて言うべき知識がない外国評論家の判断よりは、日本の友人の賞讃が一層嬉しく感ぜられるからです。しかし私を激励してくれる一つの事実は、今後私が日本に関して書くことは、何でも欧州及びその他の場所で、広く読まれることになって、私の為に都合のよいことです。私の最初の著書は、ドイツ語の翻訳が出来かかっています。

チェンバレン教授宛の喜の報告

私は今日少しづつ書いたり読んだりすることができるようになりました。尤も読書することは悪いのです。書く方は、読書に比較すれば、目を疲れさせることが少ないから。先日のお手紙にありますように、私の「知られぬ日本の面影」を愛読して下さることは、実に有難く思うことです。固より、あの作は誤謬に満ちて居ります。全く孤独の中で書いた著作などは、何れも、あんなものであろうと思います。しかし、それにしても、あの書物は大変に流行しています。出版社からの通告によれば、既に第三版がでていまして、評判も中中よい方です。特にアメリカでは熱狂的に迎えられています。「アセニアム」“The Athenaeum”誌は非常に賞讃していました。又二三のイギリス新聞紙は、非難しています。このように非難と称揚が混在しているとゆう事実は一般的に見て、文学上の成功を意味するものなのです。

小泉先生と外山学長

前出齊藤がその追悼文の中で“外山の将帥的態度を賛美し、小泉の功績を称揚して已まない”のは流石に、稀代の秀才の慧眼と言うべきであろう。彼が将帥と言う時、その脳裏に映じている人間像は、次のようなものであろう。即ち、組織や団体の草創期に出現し来る首長的人物で、自分の実際的な職務の全部又は特定の一分野を、赤心を推して人の腹中に置きつつ一任するに足る敏腕家を探して来る。この際に彼は、当面の職務の成就に無関係な、相手方の個人的偏倚、奇癖、

趣味、嗜好等、凡百の雑事の一切に拘泥せず、只管合目的立脚点^{ひたすら}に立ち続けて揺がず、その敏腕家に自由奔放な跳躍を許し、奨励しつつ、自分自身は、彼が働き易いように環境^{ゆゑ}作をしてやる。そして彼の背後に、常に、隠然たる保護者として控えている。彼が失敗すれば、決然立って直ちに最終的責任を負うが、普断^{みだん}は、天下太平この上なしの顔で、微風に吹かれつつ飄飄としている存在。斎藤は外山の態度は将帥のそれだと言う。蓋し透徹した適評である。博士は極めて個性的な一個の文教政治家（屋ではなく）で東京大学の草創期に突如として出現し来た感がある。凡組織や団体という有機体は、時としては、成熟の度が加わるにつれて所謂繁文縟礼の天地に踟躕する態の官僚化現象が漸進的（又は加速度的）に進行する変則的？生理現象を呈することがあるようだ。そのような陰湿な土壌の上では将帥的人物の出現も棲息も最早絶望となり、野に隠れた逸材の発掘も起用も、出来ない相談となる。そしてその環境たるや、遂には、平板的で矮小な、しかしスマートな官僚群の梁山泊となり果てる蓋然性？が存存するらしい。

余談はさて措き、外山、小泉の両者は、前述斎藤の所謂将帥と、その眼がねにかなった敏腕家との関係に於いて必然的に固く固く結び付いている名コンビであった。又そのことを許容し得るように、当該組織体が正に絶好の生理状態にある時代でもあったのだ。と思われる。再び漢文調で言えば両者の関係は“世に伯楽あり、然る後、千里の馬あり。”小泉は外山が、自分の性質（一国さや臍曲^{へそまがり}を指すであろう）を理解しているから（従ってそれを挑発するのを避けて）皮肉を自分宛には言わないと西田宛の書翰の中で告げている事は、勿論彼一流の単なる自嘲的修辞に過ぎないであろう。彼としては上述の人間関係の中では皮肉など存在する余地も理由も有り得ない事を“百も承知二百も合点”という奴である。

東京時代の小泉の生活点描（ヘンドリック宛書翰）

（前文省略）僕が今の地位を得たのは、一つは僕の著書の御蔭、一つはチェンバレン教授の親切な推薦の御蔭と思う。日本人は文学的著作に滅多に注意を払わぬのだが、僕の著作には、僕が外国人だとゆうので可成注意を払ってくれている。しかし僕の大望は自分の家^{うち}にいての、色、美、雅致、平和と驚異に満ちた、昔風のヤンキに在っての、独立だ。それから僕の男の子（もう余程いたずらになって、時折父を打ったりする子）を連れての2、3年間の洋行だ。妙だね。日本人の方が我我よりも子供とゆうものを、どんなにかよく理解していることか。君は子供の時分に海へ毎朝義務的に漬けられたことを覚えているだろう。こんなことは日本の親はその子に対してやらぬ。僕は自分の子にそれを試みた。ところが「そりや間違っています。子供に水を怖がらせるだけのことでしょう」とみんなが言った。果してそうであった。その上、海の中でその傍へ、もう僕を行かせようとはせず、「あっちへおいで。もう帰って来てはいけません」と、遠のいて居れと僕に命令するのだ。それから、おばあさんが彼を引受けた。すると1週間で僕同様に海が好きになった。海が恐いとゆう念に打勝ったのだ。だが日本風に子供を取扱って、始ど勝手に自然の衝動に従うに任せ、少しづつ、宥めすかして勇氣をつけてやるには非常な忍耐^{いひ}が要る。

ひどい天気だ。洪水、難破、破壊、溺死が方方にある。この国の森林伐採が多分こんな恐い天災の原因だろうと思う。(以下省略)

教授団の一員として僕は、種々な目的の為に招集される教授会に時々出席しなければならぬ。その目的の一つは史学受持の、あるドイツ人教授(原注:Ludwig Ricss)の運命を、その目的の為に、名義上にはなく、実際に、決定するにあつた。僕はその教授の力になってやることは出来なかつたし、月給の500ドルは言わずとも、この男は実際不必要な気がした。その雇契約は書き替えられはすまいと思う。僕は夫してこの男を好きはしなかつた。事実においてイルヒョウ(原注:ドイツの生理、解剖、人類学者、1821-1902、細胞病理学の開祖)の崇拜家であり、英国心理学の敵であり、その他いろいろであるからだ。僕等は何の同情ももてなかつたのだ。だが彼の友人だと揚言している人達が趨勢を見て、突然彼に背いたやり方には僕は一驚を喫した。その趨勢を与えたのは、日本の国粹保存主義の頑強な擁護者で、似非キリスト教の善良誠実な嫌悪者であつて声の優しい、はしこい、瘦せた、立派な、哲学(仏教およびその他の)受持の日本人教授であつた。僕はその男が好きだ。名を井上哲次郎という。日本の大学で、外国人教授が永久に歴史を教えなければならぬ理由は認めぬ。或は学生がその国語を以てせざる講義を聴かなければならぬ理由は認めぬと、甚だ訳が分かつた言方をした。その言うところは正しいと僕は思った。しかしそれは、外国人教授の殆どすべての運命を意味していた。(恐らく僕はこの後幾年かは続くだろう。それから外国の語学教授達も)だが、他は遠からず屹度出て行くだろう。

僕は自分に向つてこう言つた。「この連中に好いてもらおうと期待しちやいかんぞ。やっこさん、日本人なら、おまえを嫌つても、もっと淡泊に取扱つてくれよう」今敢て言うていると同じ不利なことを後に僕に対しても言われるだろう。とゆうことは全然疑のないことだ。だが、幸にも、僕の契約は、日本の政略に、同情のある政略に、根柢をもつていて、背後にしっかりした人がいる。ただの中傷は今のところ全然何の害も、僕に蒙らせはすまい。「一日にて足れり」……

訳者注:上記の“一日云云”は「マタイ伝」第6章第34節の「この故に、明日の事を思い煩うなかれ、明日は、明日の事を思い煩え。一日の苦勞は一日にて足れり」の一句を引用したものである。

(前半部省略) 6年間英文学の講座をもつていたことからの主要な結果は、僕は英文学については極少しか知つていない。そして今後大して多くは学び得まい。とゆうことを僕に悟らせることであつた。尤僕は、手控や書物を使用せずに、英文学の一般史を講義するほどのことは知つた。そして近代の主要な詩人および散文作家の講義をすることも出来るようになった。だが、僕には批評的能力を(その語の妥当な意味における批評的能力を)発展せしめ、また運用せしむるに必要な学問がない。僕はアングロサクソンを少しも知らぬ。そして英文学の、他の欧州文学における関係の僕の知識は、後期仏国並びに英国の浪漫的並びに写實的時代に限られている。

そんな事情なのだから、僕の席をどんなに僕が満たし得るか、君はよく察することが出来よう。事実を言えば、僕は決して何等偽^{いつわ}った誇示をしなかつたし、また決してその地位を要求しもしなかつたのである。僕は僕の短所を悟っていた。僕はすぐと、如何なる点において僕は勝れることが出来るかを感じて、文学をば、情緒と感情との表現として、生活の写照として、教えた。ある詩人を考察する場合僕はその詩人が産み出す情緒の性質、と力とを、説明しようとした。要するに、僕は僕の教授の根柢をば、全然自分の学生の想像力と情緒とに訴えることに置いた。そして彼等は、それに満足している（彼等の想像力は、我我のとは如何にも異っているから、その事実は大した意義をもたぬかも知れぬけれど）

小泉氏はまた1896年の某月某日に、大嫌な東京について、次のように書き送って溜飲を下げた。大学から僅^{わず}か2マイル半だ。間にいくつも泥の海がある。人力車で、毎日往きに1時間戻りに1時間、言語道断の苦しみだ。が、嬉しい事が一つある。誰も僕に会いに来ようとは夢想だもしない。会いに来るには、蹠^{みずかき}のある足があつて、ギヤアギヤア鳴いたり、卵を産んだりしなければならぬ。でなければ空飛ぶ鳥にならなければいけない。始ど絶間なしに3ヶ月間雨が降っている。この市の或る部分は水に漬^{つか}っている。他の部分は半泥土の下にある。そして水陸両棲の歓喜を増す為に、西洋式の送水管を埋める為に、市の街路の半数が断ち開かれている。かうして口を開けていることだろう。多分、これから何年間も。

（前半部省略）アメリカ文明の現状はどうだ。アメリカの上手な作家は、殆どすべて婦人のようで、その大多数は、人生の研究に“都会から”他へ出て行かねばならない、アメリカの都会生活は一切のものを枯らし焼き尽すように思われる。イギリスでも稍同じようなことが認められる。作家はイギリスを後にして、出て行かねばならぬ。固^{もと}より、ジェームス（Henry James, 1843—1916）の如き、又マロク（William Hurrell Mallock, 1849—?）の如き、大なる例外が二三はある。しかし如何に多くの大作家が如実^{じよじつ}の文明生活を取扱うか。ブラック（William Black, 1841—98）の如く、又バリー（James Matthew Barrie, 1860—?）の如くスコットランドへ行き、或はクロフォード（Francis Marion Crawford, 1854—1909）の如くイタリーへ行き、或はキプリング（Rudyard Kipling, 1865—1936）の如く珍しい国へ行く。今日誰が“ロンドン・ロマンス”を書くであろうか。こう言って来ると別の問題が又持ち上つて来る。

英国が文学上優越だとう意味はどうゆうことか。版權問題を、ほざき廻り、アメリカ作家の恥辱的待遇を云云するのは甚だ結構である。しかしイギリスの作家に比肩し得るどんなアメリカ作家がいるのだ。ディーランド夫人（Margaretta Wade Deland, 1857—?）とヂューエット夫人（Sarah Orne Jewett, 1849—1909）とフェルプス嬢（Elizabeth Stuart Phelps・(Mrs Herbert D. Ward) 1844—1991）やその他の如き婦人を除いて、どんなアメリカ作家がイギリスの手法に触れることが出来るか。ジェームスは確かにわがアメリカ作家の最良のものだ。だからロンド

ンが彼を盗む。彼は一本立だ。その名を挙げる事が出来る英国作家10人に、いや20人に肩を並べられる者はアメリカには1人もない。確にこれは報酬如何の問題ではない。真に高級な伎倆をもっている者は、早晚その要求するもの全部を必ず得ることが出来るからである。これはアメリカの都会生活、その教育、その環境、の結果に相違ない。或は過重な教育が幾分これに関係があるかも知れない。それからイギリスの作品は如何にも嵩がある。一番拙いのもだ。それに費した努力はいつも遙により大きいものである。或は思う。我我は仕事を早くやるのではなからうか。英国人は徐徐で正確だ。偉大なロシヤは、いつも除いてのことだが、他の北欧人種は今なお少少遅れていると聞いている。だが1896年のフランスでは何をしているのだ。現代の最大の作家は死んだか又は無言だ。我我の競争的な恐ろしい文明が、到頭あらゆる我我の憧憬的生活を絞殺し無言ならしめんとしているのではないか。ドゥモーリエ (George Lois Polmella Bussen Du Maurier, 1834-1896) 派の後で、英国ですら何をする事が出来ようか。アルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson, 1809-92) の後へ、アルフレッド・オースティン (Alfred Austin, 1835-1913) だ。

以上は時時念願に浮かぶ僕の考だ。それからまた、或は起こらん新理想主義のことを、ビクトリア朝の如何なるものよりも偉大な信仰と情熱と歌との絶大な新突破を、僕は思っている。そして一切の進歩は、節奏的なものだと言うことを僕は記憶している。そんなことが出来しても、それは我我が土になって一世紀も経ってからのことではなからうかと僕は氣遣う。(以下省略)

この手紙は素敵に振わぬ手紙のような気がする。だが聴てもっとよい手紙を書こう。(以下略)

僕は書物が非常に、且至急に入用なので、郵便為替を送ってやれて、正金を受取り次第書物を郵送してくれる一般書籍店と文通が出来るようにしてもらいたいと君に願う。地方の書店の手を経て注文することは絶望だ。費用がかかり間違が出来るだけではない。法外に手間どるからだ。目下素敵に必要なを感じている書物の名を別紙に書いて封入する。そして正金を送る。これだけ言っておいて、万己むを得ざる時のほか、もう君に手数をかけないことを約束する。なんとゆう厄介者だろう。僕は。

こんな前書の手紙を送るのだから、僕が急いでいることが能く分ろう。僕の地位を想像して見給え。書物無しで、学生に向って、俄造りの講義をしている、書物持たずの文学の一教授だ。東京へ着いたのは七日許前で、まだ家がない。宿屋 (筆者注：田部氏によれば明治29年8月20日、小泉は夫人と共に上京して本郷赤門前の三好屋に投宿し、ここで外山博士の来訪を受けた。ここは彼が23年春横浜から上京の際車夫に引込まれたその宿屋であった。何分手狭であったので28日竜岡町の竜岡楼に転じたとのことである。) で暮らしている。今のところ何等確実な印象を、君に書き送る訳には行かぬ。万事が朦朧だ。だが今迄のところ、僕の地位は不愉快なものとは思われぬ。却ってその逆だ。ポリクセネス (訳者注：幸福だと思っていたのに、Hermione との間を疑われて、しかも身の危きに驚いた、シェークスピア劇 “The Winter’s Tale” の中のボヘミヤ

根本重熙：小泉八雲のことども（続き）

王 Polixenes のことであろうか。) のことを思い出すと、実際僕は満足の意を表明しなければなるまい。年俸は400円だ。ところが、日本では、1円がアメリカでは僅に50セントと何某^{なにがし}なのだ。出雲やその他の地方での僕の生徒が周^{うれし}に集まって歓迎してくれ、嬉^{うれし}がっている。ある者は扶助を乞うて、それを得て居り、他のもの達は、ただ同情だけを求めている。

教授連は、遠く離れて別別に、決して衝突しない軌道をとって行動している。そうしようと思えば、同僚の誰にも全然会わないで幾年間も授業ができる。君には分かるまいが、政府の恩恵は不^ふ確^{かく}実^{じつ}だ。多分僕は少くとも、3年はやって行けるだろう。

この項続く。

参 考 文 献

広瀬朝光著 「小泉八雲論」
ラフカディオ・ハーン

田部隆次著 「小泉八雲」

「小泉八雲全集」 (第一書房)
雑誌 (八雲会事務局) 「へるん」